

区 分	内 容
議 題	県都まえばし創生本部有識者会議 令和7年度第1回
日 時	令和7年9月12日（金）午前9時30分～11時35分
場 所	前橋市議会庁舎2階 研修室
出 席 者	【委員：9名】 大森委員、坂柳委員、田中委員、橋本委員、前田委員、眞庭委員、森下委員、矢端委員 リモート参加：横田委員 【前橋市】 小川市長、細谷副市長、猪俣副市長、吉川教育長、阿佐美未来創造部長、高瀬政策推進課長、林政策推進係長、政策推進係員
発 言 内 容	
阿佐美未来創造部長	ただいまから、県都まえばし創生本部有識者会議・令和7年度第1回会議を開会いたします。 私は、本日の司会を務めます、前橋市未来創造部長の阿佐美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
小川市長	それでは、はじめに、県都まえばし創生本部・本部長の小川市長からごあいさつを申し上げます。 本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。今年度3回目の有識者会議になります。第七次前橋市総合計画の進行管理において、重要なPDCAサイクルのチェック機関として位置付けられております。本日は令和六年度に実施したこの重点事業の進捗状況について議論をいただく予定になっております。 最近の前橋市は、官民連携のまちづくりが非常に注目され、石破総理や大臣が来たりと非常に話題になっております。街中のまちづくりも進んでいますが、それ以外の部分でも各テーマに沿って、市役所で一丸となって市民サービスの向上や、住みやすさ、暮らしやすさ、また町の魅力アップのために様々な取り組みを行っております。引き続き市民の皆様、これからの前橋住み続けたいと思ってもらえるように、また移住定住なども促進できるような取り組みやしていきたいと思っております。本日も皆様から忌憚のない率直な、前向きなご意見をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。
阿佐美未来創造部長	ありがとうございました。 また、本日は副本部長である細谷副市長、猪俣副長、吉川教育長にもご出席いただいておりますが、時間の都合上、ご紹介のみとさせていただきます。

大森委員	続きまして、市側の出席者についてですが、自己紹介については省略させていただきますが、名簿に記載のとおりとなっておりますので、よろしくお願いいたします。 それでは、議事に入る前に資料の確認をさせていただきます。 資料は、次第下部に記載のとおりとなっています。 必要に応じてお手元でご確認いただきながら、ご協議をお願いいたします。 (1) 県都まえばし創生本部有識者会議委員名簿 (2) 県都まえばし創生本部有識者会議設置要綱 (3) (資料1) 第七次前橋市総合計画 令和7年度行政評価について (4) (資料2) 令和7年度行政評価シート (全51事業) (5) (資料3) 行政評価に対する意見等 (6) (資料4) 第3期県都まえばし創生プラン進捗管理 (7) (資料5) 新しい地方経済・生活環境創生交付金(地方創生推進タイプ) 活用実績一覧 (8) (資料6) 新しい地方経済・生活環境創生交付金(デジタル実装タイプ) 活用実績一覧 (9) (参考資料) 第七次前橋市総合計画(創生プラン) 令和7年度行政評価等について もし、不足のものがありましたら、挙手をいただければ、すぐにお持ちさせていただきますのでどうぞよろしくお願いいたします。 なお、石川委員、稲田委員、江口委員、清水委員、山形委員については、欠席となっておりますので、ご了承ください。 それでは、次第の「3議事」に移ります。 ここからの進行は、設置要綱第5条第2項により、共愛学園前橋国際大学の大森委員さんに座長をお願いしたいと思います。 恐れ入りますが、冒頭に一言ごあいさつをいただき、議事進行をお願いいたします。よろしくお願いいたします。 お集まりいただきありがとうございます。本日は、大事な計画の進捗を確認することになりますので、忌憚のない意見ををお願いします。後半では次の計画に向けてスタートの話もあります。最初に事務局から第七次総合計画の進行管理について、重要な部分を説明します。すでに皆様から事前にたくさんのご意見をいただきありがとうございました。その意見に対し事務局の考え方を説明しますので、それに対して疑問やご意見があるかもしれませんので、忌憚のない発言をいただければと思います。 また、この会議は公開となっておりますので、傍聴、撮影につきましては許可することといたしますので、よろしくお願いいたします。 それでは、「(資料1) 第七次前橋市総合計画 2025 年度改訂版について
------	--

	て」進めていきます。 冒頭事務局から説明をしていただいたあと、ご意見ご質問等いただきたいと思います。 それでは、事務局からよろしくお願いいたします。
事務局	【(議題1)「第七次前橋市総合計画の進行管理(行政評価)について」 説明
大森委員	全ての意見に対する項目についての説明は難しいため、ピックアップして説明をいただきました。意見に対してそういうところを聞いたのではないと思うような回答もあったかもしれません。ここで何かを決めるものではありませんが、皆さんも意見を踏まえて最終評価となりますのでよろしくお願いします。
前田委員	質問で若い人が出ていってしまう、特に女性が出ていく傾向があるという意見ですが、ここには古い慣習とかジェンダーの問題が関係していると分析され、前橋だけでなく群馬もそうですし日本の地方はこの問題を抱えています。求職者の意見や、若い世代の意見がどのくらい本当に、調査で入手出来ているのか気になります。ネット場にも例えば「地方女子プロジェクト」など、若い女性が地方から出ていくのかということを実際に語っているものがたくさんあります。インターネットだけではなくてもいいので、県内にいる若い女性たちの声を聴く工夫をされたらと思います。 実際の事例ですが、知人の20代の女性で群馬から出ていくとなった方の個人的な話で一般的ではないかもしれませんが、その人のお母さんが働いていて、昼間仕事ですごく疲れて帰ってきて、地域の役員もやっているため、家の中のことをして食事を作って、地域に会議に出かけて夜遅くに帰ってくる。これが毎日なのを見ていて、私はこんなの嫌だし出来ない、同じことをやれって言われているように見えると言っていた。これに似通った話はいっぱい聞いたことがあります。 古い慣習、ジェンダーの格差もすごく強いんじゃないかと思う、事務局が、企業に働きかけると言うことを言っていましたけれど、どうして女性が出ていくのかを、女性に聴く工夫をされたらと思います。ジョブセンターのアンケートだけではなくて、もっと色々なところからなぜ女性が出ていくのかというのを本腰を入れて声を集めて分析して、しっかり企業等と共有していくのがいいと思います。政策の方向性がずれていないかという感覚で分析して、良い方に持って行っていただければと思います。
大森委員	ありがとうございました。とても大事なことだと思います。例えばですが女性活躍推進法が出来た時には、タウンミーティング的にいくつかの世代の女性が集まってみたいこともしていました。そんなイメージでしょうか。それとも個別インタビューや、調査委託もあると思います。

前田委員	これが一番いいと思うのは絞り込めませんが、事例の一つとして、ある地区の区長さんが、女の人が出ていくと、女の人が料理を作るとかおもてなし等をずっとやってきている地域だったため、お祭りが続かなくなり、女の人を集めて、考え方や地域に住んでいてどう思うか月に1回集まって生の声をお祭りの運営や行政区の取組に活かしたというのがあります。タウンミーティングで声を聞くのはよくある手法ですが、その意見は本当の声を発する人がどのくらい集まっているのか疑問です。やりましたの形を整えても意味がないと思うので継続的に声を聴く機会があったほうがいいと思います。どこまで行政がやるのかは、手間も時間も掛かるし委託もあるかもしれませんが、特定のところに委託することで本当の声がどれくらい集まるのか検証しなくてはならない、委託は慎重に考えないといけないと思います。 可能な範囲で声を集める機会を継続的に数多く持った方が本質的な声は出てくるのかなと思います。
大森委員	ありがとうございます。とても重要なポイントですが、政策をやるときには、対象となる人たちが本当に大事です。全国的な課題となっていますが、若い世代が大学に入学する時、また就職の時に県外に流出しているというのも大きな問題です。
小川市長	若者調査だと、女性は特に前橋に住み続けたいっていう意向を持っている高校生あるいは中高生が多かったっていうのを意外に思いました。前田委員のおっしゃっている地方の生きづらさが分かると、ここに住むのではなくて東京に行きたいっていう数字が大きく出るかなと思ったら、意外に地元で住み続けたいっていう意見が多かった。前橋に住みたいって思っている若者女性がどうしたら住み続けやすくなるのかっていうところは引き続き取り組んでいきたいなと思います。 また、古くからの慣習とかイメージっていうのは染み付いてしまっているところもあるので、やっぱりそうじゃないんだよ、今は違うんだよっていうのをしっかり発信していくのも大事な要素なのかなと思います。
林政策推進係長	ありがとうございます。このあとに説明がありますが、若い人や女性に限定した話ではありませんが、第8次総合計画に向けて、市民の方にインタビューを始めています。若い人や女性の方の意見も集めていければと思っております。
大森委員	女性の話でいうと、先程、市長がおっしゃったように、進学時には逆にジェンダーが働いて、高校生や大学生の女子は地方に残る傾向があります。進学時には、男子はレベルの高いところで東京に行く、女子は大学までは地元にいるが、今後就職して社会人として暮らし始めると、そこに先ほどの前田委員が言ったようなリアルな生きづらさが見えてく

	るのだと思います。地元の大学で、みな残ってほしいのが本音ですが、進路選択にも地域のジェンダートラックのようなものがあるのかなと思っています。
森下委員	重点２１の回答についてですが、成果指標を事業所数に変えて市内企業の倒産件数年間に指標を変えると回答がありますが、正直、いろいろ調査の方法によって市内の事業所数っていうのを正確に把握することは難しいので、置き換えるとそういう理解でよろしいでしょうか
小島政策推進課係員	今まで成果指標として使っていたものについて、整理が必要と検討を行いました、調査によって確認がしやすいものということで、企業に年間倒産件数に見直しを行わせていただきました。
森下委員	今の指標の事業所数は、三年間でかなりの伸びがあつて、正直絶対におかしなと思い質問させていただきました。それから、倒産件数を指標にすると、企業の倒産には色々な外部環境の事情があつて、行政の支援と外部環境のパワーバランスを考えると外部環境の方がはるかに大きい要因になってくると思うので、これを指標にすることで評価がかなりしづらくなると思います。むしろ、資金繰り支援などの補助制度を行っているので、そこに何社資金繰りの支援をしたとか、補助を行った件数などにしないと、かなり勇気のある大胆な指標になってしまうのではないかと思います。
大森委員	貴重なご意見ありがとうございます。市が頑張ったところで、という部分が相当に大きいということですね。
森下委員	今までもコロナやトランプ関税だとか経営には予想外のことがいろいろ起きています。その時に、適正な評価できなくなる年が数年にわたって起きることがありえるのであまり指標としては私は適さないと思います。
大森委員	参考にしていただければと思いますのでよろしくお願いします。
眞庭委員	確認ですが、資料１８ページの赤城山ツーリズムスローシティーの推進ということで、前橋市がスローシティーを掲げていることは承知しています。スローシティーエリアが、資料にあります、道の駅と、赤城山とスローシティーの推進を図っていくということですが、スローシティーエリアを前橋市がどこに決めたのか自分の感覚になかったため、違和感がありました。 また、コロナ禍で、赤城山のエリアとスローシティーエリアを有機的に連携させる。それには、人流データを活用するとのことでしたが、人流データを見てもどのぐらい行っているとかのデータしかない中で、今度、前橋市として地域連携は中心市街地でも当然ありますし、赤城山、

	道の駅、敷島にも力を入れていると聞きますので、有機的な連携で何か具体的に考えていることがあればお聞かせください。
大森委員	ありがとうございます。赤城山、スローシティーエリア、赤城山麓ということになりますが、その説明と赤城・敷島・市街地との有機的な連携について説明いただければと思います。
林政策推進係長	まずスローシティーエリアについては、赤城山麓のみです。道の駅はエリアに対象外になりますが、非常に近い位置関係にありますので、ここを拠点に赤城南麓のハブになってもらえれば、入口として使っていただければと考えております。敷島や中心市街地との連携については、まだこれからで、今の時点ではご説明出来ない状況です。例えば交通の問題ですと、国道17号線を軸とした、行き来しやすいような取組を進めて行きたいと思っています。
小川市長	スローシティーエリア自体がなかなか認知度が低く、正しく伝えられていないことは、市として課題を持っているところになります。これは市でスローシティーエリアを決めたのではなく、加盟する際に、国際連盟が赤城南面エリアを限定して指定したことが一つです。そして、道の駅ですが年間400万人訪れ県外から来ている人も多いので、ここに来る方に前橋の魅力を伝えていくことが重要だと思っています。道の駅に来た人がそのまま、街中や赤城山に行こう、とならないとしても、前橋にはこういうところがあり、次は行ってみようというような次に繋がるきっかけをしっかりと伝えるための拠点になるように情報発信をしていくことと、色々な他の地域と連携できるような仕掛けも、これから作っていったらと思っています。
大森委員	ありがとうございます。スローシティーは日本でも気仙沼と前橋だけです。赤城南面とスローシティーの暮らしや文化が繋がってくると、そこで活動している人たちの顔も浮かんでくる。そうするとその暮らしみたいなものに惹かれて移住みたいなことにつながっていく、市としてはそこにつながっていくと本当はいいだろうと思っています。
橋本委員	先ほど赤城山の件ですが、交通の問題について今後の展望をご質問させていただきました。大沼のキャンプフィールドとビジターセンターがオープンした後に状況を見ながら、検討していきたいというご回答をいただきました。そこまで急に爆発的ではないにしても、絶対に今より訪れる人は増えると思います。赤城山まで登る公共交通、例えばバスで登りたい人が何人収容できていて、どのくらい運べるのかということですが。実際、赤城山に上がった人たちが自家用車で動いた場合に駐車場がどのくらいあるのかなどです。

	県立公園なので群馬県の話ということなのかもしれませんが、前橋市の一つの資産でもある赤城山なのであつという間にオーバーツーリズムみたいになると、今のキャパシティでは全然受け入れられないと思います。群馬県と連携しながらと記載がありますが、来場者が増えて、オーバー気味になってからでは多分遅いと思います。来年オープンなのだとしたら、早めに会議体等を作っていた方がいいのではないかなと思った次第です。道の駅が400万人来ているという話もありますので、今まだ2%ですけども、赤城山の入り口として道の駅を作られたような経緯もあったかと思うので、400万人の1/3が登ったとしても受け入れられるぐらいのものを考えて置かないといけないと思います。 もう一点が、アーツ前橋と文学館ですが、先ほど説明で図書館のイベント来場者数がすごく伸びているのは素晴らしいことだと思います。その要因として地元の高校との連携の説明がありました。 アーツ前橋と文学館は高校生の活動の場として活用されているのでしょうか。
阿佐美未来創造部長	現在、高校生と定期的にイベント等を実施している状況はありません。企画によっては、大学との連携ですとか、高校の例えば吹奏楽部ですとか、そういったところと連携はありますが、定期的に事業と一緒に実施しているのは現時点ではありません。
吉川教育長	補足ですが、今後、部活動が地域展開になっていきます。そして第二と第四の土日がこの秋から部活動が地域に展開をしていくということになりますので、その観点において中学生にアーツに親しんでもらおうということで、夏休み中の中学生への鑑賞の仕方とかを学んでもらっています。
橋本委員	ありがとうございます。街中の商店街の人たちは、レセプションというか、プレビューの時にご招待いただいて見に行くことができます。そういった形で中学生とか高校生をご招待して見ていただくみたいなことはできるのでしょうか。自分の子供たちもそうですけど、行ったことがないっていう子たちが多分多いと思います。これは、すごいもったいないことだなと思っていて。入館料が安いとか高いとか、そういうことではなくて、行っていないってすごくもったいないと思っています。子供達のアートとか文学に興味芽生えていないと思うので、招待してみなで行ってみようという、そういう企画を立てただけだと、もう少し地域と連携ができるのかなと思っています。 ここでの質問の意図は館外の活動は減っているということではなくて、地域の人をもっと呼び込んでみてはということです。一連のことが

	あったので、アーツが館内活動に集中しないといけないことは重々承知しているので、外に出てほしいということではなくて、もっと呼び込んだらいいと思います。
大森委員	学校とコラボすることはいいだろうなと思います。
小川市長	文学館では高校生とか若者を来てもらうような、巻き込むような企画を結構やっているイメージがあります。今のサイハテタヒさん自体が若い人に人気の作家っていうのもありますが、非常に企画も若者が来やすいものになっています。市民の朗読会も毎週やっているんで、そこに高校生が来て、朗読をしたり、スチューデントコンサートも今度ありますけれども、音楽とか発表の場として文化を使ってもらったりっていうふうに巻き込みもできる要素もあると思います。企画は、学芸員の皆さんが行っていますが、そこに少し若い人たちが来て、楽しめ、わかりやすく、ビジネスについて学べるようなものがちょっとずつ入ってくると誘いやすくなるのかなと思いますので、一緒にアーツの皆さんと考えていきたいと思っています
大森委員	ありがとうございます。赤城の交通の件ですが、道の駅ができた時には、みなやっぱり行ってみたいから、集中してすごい大渋滞しました。赤城山はなおさらもう一本道なので、あそこにみなで車で行き始めると、キャンプサイトに着くまでに何時間かかったみたいな話になりかねないと思います。どこかにモータープールがあつてのようなことを、考えないってということになってくるかもしれないと思います。準備は進んでいるのでしょうか。
細谷副市長	委員さんのおっしゃたとおりですが、交通の問題は大きな課題でビクターセンターなどです。オープンしてからその利用状況を見てからという考え方もありますが、もしかしたらパニックになってしまうので、今からシミュレーションしなければ思い、色々議論はしております。ミニマムな対応と大きなビジョンで分けて整理して、土日は赤城山直通バスが前橋駅から朝と夕方出ていますが、それでも土日は乗り切れなくて一台 57 大型バスに乗り切れず、バス会社に連絡をして続行便の対応をするのが現状です。大きなイベントがなくても、土日は観光客いっぱい、加えて、例えば台南市とのランタン祭り等のイベントがあると、バスを増便しようとしても、そもそも一本道で大渋滞起こしたとことでバスが機能しないということを考えますと、当面は増便をすることに加えて、パークアンドライドも検討しないと、公共交通が機能しないと思い、渋滞については最低限は考えなくてはと思います。道の駅は赤城山の観光エリアのゲートウェイとして整備しています。検討のスタートの時はパークアンドライドは、営業に影響があり言えませんでした、現在の利

	用状況は分析して、来場者がそこを足がかりとして赤城山観光を楽しむような交通モードも考えるべきなのかなと思います。その一端が南北感幹線交通軸で渋川と道の駅前橋荒牧前橋駅下川方面という、一つの大きな幹線軸も作っています。この幹線軸に、道の駅と赤城山というものがアクセスしやすいようなことも考えるのだろうなと思っています。今から色々なシミュレーションをしながらということと、群馬県さんもかなり心配して、ケーブルを引くかだとか、色々な議論がありますので、山頂の赤城山整備に合わせて交通問題っていうのは、県と早急に議論始めたいと思います。
大森委員	ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。
坂柳委員	産後ケア事業についての質問ですが、利用申請についてですが、現在初回の利用申請時のみ申請が必要とありますが、出産をした方が自分で申請して利用が始まるということでしょうか。
猪俣副市長	ありがとうございます。産後ケアについては、保健師などを通じて基本的にはご本人の希望に応じて申請いただくものです。
坂柳委員	出産の情報については、病院から提供されるものなののでしょうか。自分で取りに行かないといけない書類ということでしょうか。
猪俣副市長	地区担当の保健師が出産前から伴走型支援ということで関わっていますので、そこでご案内差し上げるようにしています。
矢端委員	杞憂ならいいのですが、私の嫁の母が大阪の〇〇区で保健師、助産師をしています。お子さんを産んだばかりの母子家庭には、市から情報提供があったら申請しなくても必ずまわることになっています。本当に困っている人が制度を活用できるか、声をあげられるのかというのもあると思います、困っていると言える人は力のあり、周りに援助を求められる人だと思います。出産した方にまんべんなく一度声掛けするとか、行かなくても電話をかけるとかされているといいなと思いました。
猪俣副市長	産後ケア事業とは別に、先程申し上げた伴走型支援という事業が始まっています。妊娠届をだしていただき、その後出産されて、ご本人とお話をさせていただき、産後状況の確認をさせていただき、ほぼ全ての方に対応させていただいています。
矢端委員	女性の流出問題ですが、私の農場に来ていた若夫婦が県外から来ましたが、1年で出ていくことになり、その理由の一番大きいものは仕事ではなく、出産育児を迎えて、親戚が近くに一人もいないので、本当に困ったときに頼れる親の近くに引っ越すこととなりました。自分の力の足りなさを痛感しましたが、出産とか育児とか介護は、家族でやるものだ

	という考え方と、家族だけでなく第三者が積極的に関わる方が、長続きしやすいと言われていますが、今でも家族内の問題と考えることが多いと思います。母親の生き方を見ていて、私もそうなるのかっていうのは、すごくわかることです。そこに行政にも頼っていいという視点、行政もこういう支援をしてくれるとか、お金だったり時間だったり、手助けをしてくれるよっていう前橋の強いアピールがあったらまた違うのではないかなと思います。してらっしゃるかもしれませんが、具体的には言えないのですがこれだけ色々なことをやっていますという、アピールも大事なことだと思います。 次に農業者の立場からですが、農業支援は以前と比べて充実してきていると思います。緊急の問題として豚熱も4件発生し、それを中心に、よく対策してくださったと思います。長期的に農業をどう支えていくかという問題で、最近賑やかしていますが、農業を継ぐあてのある人が3割を満たないことがわかり、30年前からも30%ぐらい減ってしまっていて、先細りの産業ですが、今年は米問題があって関心を集めました。私たちの農家にとってはすごくチャンスで、皆さんが大変だねって言うてくれたり、このままで大丈夫かなって言うてくれたりすることが活力になっていて、関心を持ってくださったことがありがたかったです。正直、米はちょっと安すぎます。70年前から同じ価格で買いたいと消費者の方では、私たちは本当にやっていけないです。農業者の立場をはっきり皆さんに分かっていただいたのでありがたかったです。 農業をどう支えていくかですが、農業機械がものすごく高いです。1000万から1500万っていうものを毎年買い替えるような、私は米麦を40haぐらいのそんなに大きい農家じゃないですが、生活金融公庫とか、色々な補助金がありますが、前橋市からの補助金が三年前まではほとんどなく、農業予算は市の予算の円グラフにすると線にも行かなかったぐらいのものが、ちょっと線になってきたっていうところを評価したいです。前橋市の農業機械の補助金が150万だと思いますが、そこまで上げてもらいありがたいのですけども。沼田市では1000万です。そういうこともご考慮いただいて、限られたお金の中でのやり取りですが、ぜひ農業の方への支援をお願いしたいと思います。
大森委員	ありがとうございます。続いて田中委員さんお願いします。
田中委員	私は子供の話が中心になるのかなと思います。最初に前橋の気温ですが全国的にもだいぶ暑く、41度ということで外に出てはいけない、熱中症アラートが朝から防災無線で流れています。保育園に来ている子供は、室内で遊べたりと、過ごすことが出来ますが、それ以外の保護者の方も多くいらっしゃるの、室内で遊べるような大型だとお金もかかったりではありますが、楽しく子育てが出来るような、夏休みもありますので皆さんが使えるような大型の施設を今後は考えた方が良くと思います。

	また、子育てについてですがワークライフバランスじゃないですが、私達は受け皿の施設になっているところではありますので、こうしてもらいたいとか世の中や皆さんの期待に答えられるように頑張っている最中です。そこは行政の協力がないと出来ないところもありますので、病児にしても障害にしても子育てにしても地域の子育て支援センター、妊産期、出産など色々ありますが、子供が生まれる前から各園では協力体制でやっていこうというお話はさせていただいています。どこまで期待に応えられるかというのはありますが、少しずつそういう流れになっています。皆様の協力やご意見をいただきながら、それに応えられるところでありたいと思います。団体の意見として出来る限りやりますが、そこには行政の手助けや色々な相談をしながら進めていければいいかなと思うところです。
大森委員	ありがとうございます。横田委員どうでしょうか。
横田委員	二点ほどありまして、一つ目が移住と就職についてで、もう一つが女性とか若者の流出のお話をしていきたいと思います。 一つ目が移住と就職の部分のつながりが非常に結びつきが強いところかなと思います。移住は移住、就職は就職というよりかは一つとして考えられたらというところで話をするのですが、赤城の話も出てきたり、前橋はそもそも様々な魅力が各地に詰まっているので、移住という発信面で行くと、オール前橋的な取り組みかなっていつも思っています。色々な観光地とか、様々な地域がある中で、その他地域に勝る一番の観光先にならなかったとしても、いつか行ってみたい。そういうところを作っていくことができたらいいいのではないかなっていうの考えています。赤城についても、豊かな自然がもうやっぱりすごく、都心からアクセスもそんなに遠くなくて。豊かな自然に触れられてとか四季折々なっていうところを、リトリート文脈でもいいし、教育文脈でもいいし、福祉とかでもいいかもしれないし、様々な活用方法でこちらから届けられたらいいかなっていうのは感じています。 インバウンド需要も、赤城の方とかもかなり海外の方も来られています。インバウンド需要も見込んだ発信とか多言語対応とかは、発信の部分は一層心がけられと思います。 チラシで言語の部分とか、そういうのを対応されているのも少し見かけたことはありますが、さらにそういうのご対応いただけたらいいかなと思います。日本では人口減少で、前橋もなかなか若者が少なくてっていうのはあるのですが、世界で見たら人口の1/3がいわゆるゼット世代なので、若者や世界に向けたっていうふうには、他の地域からの若者の取り合いみたいなのというよりかは、観光という意味では幅広く見られたらいいのかなというふうに思います。サイトの充実とかも予定されているということで、それはすごく有効かなと感じています。 お答えいただいている部分もあるのですが、観光とか移住とか就職とかっていう、具体的な連携体制の構築みたいなのが、ご回答いた

横田委員	だいた中では、まだちょっと具体的に見えていないので、そこは早急にしていただくことを願います。 二つ目ですが、女性や若者の流出とか講座の集客みたいところですが、ジョブセンター前橋でやっている講座もかなりカジュアルなものや、実用的なものや色々工夫されていますが、SNS を拝見すると女性とか若者では情報収集するのにとても重要な SNS が、フォロワー百人未満でいいねゼロとか一とかが結構ザラで運用面とかはちょっとどうかなっていうふうに思いました。SNS は群馬県でもやっていますが、プロはちゃんと入れてやった方が良いのかなって思うのは思います。せっかく良い内容をやっているのに周知みたいところがうまく届かなければ先ほど何度か会議の中でお話ありましたが、知らなかったとか認識が広がっていないのではないかっていうのは、ここだけの話ではなくて、もっと裾の広いようなあの課題なのかなというふうに思います。わざわざフォローしたいチェックしたいみたいな状態はやっぱり、市から作らないと勝手には作ってくもらえるものではないので、ちょっと具体的な策を検討いただけたら嬉しいです。 就職困難な方の受け皿みたいな言葉がありましたが、全体的に積極的なとか、前向きな発信っていうのを前橋の地域全体がこう前向きな発信をしているように、就職面も困難な方からその前向きな方までのカバー範囲広いというイメージ転換をしていくっていうことができれば良いのではないかと思います。 高校生学習室との連携ですけれども、これも工夫できたらいいかなというふうに思っています。今の若い子たちはご存知だと思いますけど、結構様々な意味での刺激強めのコンテンツに触れ慣れているのでやっぱり次世代に普通の企画はやっぱり届かない響かないです。なので、尖った企画っていうのを前橋ならではのものをうまく入れ込みながら、狙えたらいいかなと思います。ここについてちょっと具体的なアイデアっていうのをここで発案することはしないのですけれども、そのような方向性でお考えいただけたら嬉しいなと思います。
大森委員	ありがとうございます。たくさんのご意見いただきました。時間的なこともあるのでご意見として、しっかりと受け止めてっていうことでもよろしいですか。では坂柳委員お願いします。
坂柳委員	私の方からは、質問の補足を一つと、あと意見を二つほどと思っております。先ほど、安心ネットにつきましては、ご丁寧な説明をいただきましてわかりやすかったのですけれども、生涯活躍のまちづくりの評価の中で、日赤の跡地（ココルンシティ）で、色々な多世代イベントが企画されていて、特に地域の方の発想や高校や大学、施設の方も参画されているということで、とても良かったと思います。ココルンシティには障害者サポートセンターが入っているのですけれども、そこも開放されてオープンに交流されているのが良かったなと思うのですけれども、指標

	では参加者数ということで評価されていますが、これが実際に多世代だったのかどうか分かりにくく、分析されているとしたら、高齢者とか障害者の方とか子育て世代とかそういう分析をされているのかどうかというのが、補足の質問です。 皆さんのご意見にもありましたが、女性のことを聞くなら女性に、障害者の施策だったら障害者に聞くという当事者性について、すごく前橋市では進んできたなっていう感想を持っています。こういう計画の作成に関してもそうですし、第四次の障害福祉計画に市民ワークショップを企画していただいたりとか、やはり当事者の声を実際に聞く、生の声を聞くっていう姿勢がすごく増えてきたなと思っているので、それはこれからぜひ継続していただきたいところです。 でもう一点は、色々な多世代とか多様性ということで、前橋市でもすごく意識する中に、常に障害の方たちについての視点っていうのが忘れずに入っていることが必要ということです。ソーシャルグッツプロジェクトとか、先ほどの道の駅についても、あの広いスペースの中にショップカフェQということで、障害者の方達の商品を販売するお店があります。販売だけでなくお店の当番という働く場所にもなっています。中心商店街で行われたシンポジウムの中でもヘラルボニーの方が登壇されたりとか、障害者を忘れない状態になっていることがすごくうれしいなと思っております、これからも高齢者、子育て世代、若者世代、外国人の方など色々な方がいる中で、障害者の方たちの暮らしやすさっていうのも、常に頭においていただいて政策が展開されているといいなと思います。
大森委員	冒頭の多世代いうところで、今わかる部分はありますか。
猪熊政策推進課係員	ご説明できるものではありません。
大森委員	改めて確認するか、あるいは今後確認できるようにしておいてくれるといいねということでお願いします。 あの私からも一つ、重要なポイントですが、委員からのご意見の中でも二面的にあの語られているのが、さっきお話しあったプレコンセプションケアのところで、事務局と打ち合わせした時も言ったのですけれども、非常に重要なものです。例えばその妊娠期について、学びをしていきましょうねという話です。少子化対策と組になって産めよ増やせよのようになるとそれは個人の尊厳の問題になってくるし、選択の問題だし、産む産まないだけでなく産めないっていうこともありますし、ただ知っていたら知っていることで、悪い情報でもないです。その卵子がどうなってしまうことや、上手にやらないとテクニカルな話でもないのですが、ただ行政の講座に行ったら産めって言われて帰ってきたみたいになるのは本来的ではないし、それはやってはいけないことです。

大森委員	国の事業で大学生とか高校生との学び合いの場でこれを入れないと補助金出しませんみたいなこともあり、私の大学でもそれを受けるのかなり逡巡したというところもありましたので、丁寧にやっていくといいのかなというふうに感じています。 一巡したのですが、時間的には次の議題に行きたいところではありますが、ちょっと言い残したっていうこととか、皆さんもお話し聞いてこれはというのがあれば、お願いします。
前田委員	学校不登校の問題で9番のスライドで左側のところに家から出られない学校に行けない、教室に入れないという学校生活に悩みの段階ごとで何に対応するかというのが書かれて、横文字で取り組みがいくつも書かれています。今日いただいた行政評価シート案の冊子24ページに関連事項が書いてありまして、評価理由等のところの文章の四行目に不登校の要因としては無気力、不安が最も多くなっていると書いてあり、子どもたち自身が無気力や不安を克服する力を身につけるためにはとあります。確かに無気力と不安が大きな要因だということが分析で出ていますが、その前に学校に通っていて、行かなくなるその要因が無気力不安ってなるのです。それでスライドの方で言うと、前段階として、学校生活で悩みがあるっていう段階があって、教室に入れなくなって学校行けなくなっていく。これは問題のありかの捉え方が違うのではないかなという感じがここの文章からはあります。無気力と不安になる理由がその前段階にあったわけで、学校生活で悩みがあるという段階が、スライドの中でも設けられている。つまり学校生活の中に何があるか、子どもたちが学校に行っている間になぜ無気力になるのかっていうところを分析をしようという視点が薄くて、文章に子どもたち自身が気力や不安を克服する力を身につけると、これ個人の問題として子どもの中の問題として捉えています。これは個人モデルの問題の捉え方で、社会環境の方に問題がある環境に問題があると、捉え方の社会モデルに視点を変えないと問題も立ち行かなくなってくるというのが女性問題でもあるし、子どもの虐待の問題とか、色々暴力の問題でもあるわけです。そうすると、子どもの内部に問題があってという視点で、取り組みをするのを根本的に視点変えられたらどうかなという感じはします。色々なものをこうたくさん横文字のものがたくさんついていて。それに人もつけて予算もつけてっていうことで大変だと言って、これ多分いろいろどんどん膨らんでいくのかなと思います。根本的には多分、あの問題は減っていかないのではないかな不登校児は減っていかないのではないかなというふうに思います。根本的に明治以降100年以上続いてきた学校のあり方自体が機能不全に陥っているのではないかな、視点も環境の方に向けることをやった方がいいのではないかなと思います。市のレベルで何が出来るのかという話ですが、他市の公立の小中学校で不登校ゼロになった取組も全国にはありますので、そこを現場視察するなり、やっているかもしれないですが。学校へ行けない教室に入れない、これを子どもの能

大森委員	力の問題にしています。出来る、出来ないの話にして個人の能力の問題にした表現になっているところが、クエスチョンマークがつくかなというふうに思いました。 ありがとうございます。大変重要なポイントだと思います。根本的におっしゃった通りですが、それをさらにやっていくと根本が変わっていないから増えるしかなくて、個人の問題にしていくと対応策も百人いれば百通りしなくてはならないくなるという、行政としてもしんどくなるのかなと思います。
小川市長	アンケートをとると、子どもたち自身もなんで学校に行かない選択肢をしているのか明確にわかっているわけではないので、どうしてもアンケートでは無気力・不安というところに回答してしまう人が多いのだろうなと思います。前田委員と少し意見が違うかもしれませんが、無気力不安の原因は学校だけにあるとは思っていないので、学校の中にもあるかもしれないし、他の色々な要素が絡まって、学校に行かないという選択肢をしている子どもが増えているのだろうというのはあるので、背景をしっかりと捉えるのがすごく大事で、子どもたちのために何が出来るのかを学校も地域も保護者もみなで考える。不登校がいけないのかっていうところも含めてですが子どもたちにとって何が一番いいのか、どんな選択肢を用意するのがいいのかをしっかりと考えないといけないと思いますが、前田委員がおっしゃったように子どもの選択というか、個人的なところが誇張したような記載になっているのは、誤解をあたえてしまうというのはあるので、良くしたいと思います。
吉川教育長	本当に表記の仕方一つで、与える印象のが全く違ってしまい、受け取る方の印象も違ってしまいうので、それは気をつけていきたいと思います。社会が変化していて、行政がどこまでできるかっていうのはありますけれども、教育委員会だけで解決ができないことがたくさんありますので、健康部、福祉部、子ども未来部と一緒にあって、一人の子どもを多面的に見ていこうというチームで取り組んでいくという方向になっています。その中から、色々な新たな取り組みも考えられるといいなと思います。 不登校児童生徒が増えていますという書き方になっていますけれども、この中を少し分析すると、実は中学生はほぼ横ばいになりつつあります。小学生が増えているというところが大きくて、この中学生がなぜ横ばいになってきたのかを今後しっかりと捉えていくと、対応方法がいろいろ考えられるのではないかなと思っています。ありがとうございます。
前田委員	一言だけすいません付け加えですが、不登校の子どもを抱える親の勉強会とかイベントに出かけますと母親が本当に多く来ており、女性問題と絡んでいます。不登校の子どもがいるということは、母親の就労でき

	ていなかったり、就労は非常に厳しい状態だったり、あるいは離婚の問題もそこにあるということも、ちょっと添えておきたいと思います。
大森委員	他にはよろしいですか。全体を通して、沢山のご意見を出していただきまして、ありがとうございます。皆様の様々な視点から、ご意見いただき本当にありがたいなと思っています。それでは、あの議事（１）の第七次前橋総合計画の進行管理はここまでとさせていただきます。
事務局	次に議事の（２）新しい地方経済・生活環境創生交付金について、（３）第八次前橋市総合計画の策定に向けた取組についての説明をお願いいたします。 （２）新しい地方経済・生活環境創生交付金について 【（参考資料）第七次前橋市総合計画（創生プラン）令和７年度行政評価等について（スライド３４ページから４２ページ）】説明 【（資料４）第３期県都まえばし創生プラン進捗管理】説明 【（資料５）新しい地方経済・生活環境創生交付金（地方創生推進タイプ）活用実績一覧】説明 【（資料６）新しい地方経済・生活環境創生交付金（デジタル実装タイプ）活用実績一覧】説明 （３）第八次前橋市総合計画の策定に向けた取組について 【（参考資料）第七次前橋市総合計画（創生プラン）令和７年度行政評価等について（スライド４３ページから４８ページ）】説明
大森委員	新しい地方経済・生活環境創生交付金の話と、それから次の総合計画に向けてスタートし、現在の取組のご報告でした。ご質問がありましたらお願いいたします。
矢端委員	事前インタビュー・事前アンケートのQRコードは私の個人的なSNSをに掲載はできますか。
事務局	掲載出来ます。
大森委員	予定されていた議事が終了いたしましたので、座長の任を解かせていただきます。議事進行にご協力いただきまして、ありがとうございました。
阿佐美未来創造部長	大森委員さん、議事進行ありがとうございました。 次に、事務局から事務連絡等がありましたらお願いします。
林政策推進課係長	事務局より１点、ご連絡があります。 本日の会議録につきましては、作成でき次第、委員の皆様方に送付さ

阿佐美未来創造部長	せていただき、内容の確認後、ホームページで公表となりますので、ご承知おき下さいますようお願いいたします。 事務局からは以上でございます。 以上をもちまして、県都まえばし創生本部有識者会議・令和7年度第1回会議を終了します。 長時間にわたりご協議いただき、誠にありがとうございました。 【終了】